著作権保護コンテンツ

特集

「エルマー」「じぶた」「へなそうる」

渡辺茂男の世界

子どもの本と図書館

『エルマーのぼうけん』『しょうぼうじどうしゃ じぶた』『もりのへなそうる』。
今も子どもたちに読み継がれる、多くの創作や翻訳を残した
渡辺茂男さんが亡くなられてから10年。
子どもの本のために捧げられたその生涯と仕事を、改めて振り返ってみましょう。

撮影／石川正勝

多摩市立図書館本館にある「へなそうるのへや」。

Shigeo Watanabe
1928-2006

長男・鉄太さんが語る、父の生涯

多摩の家の書斎にて。

父・渡辺茂男の生涯について、私の知っていることをお話しします。

まず父の子ども時代ですが、1928年に、静岡県静岡市で、12人きょうだいの上から4人目の子どもとして生まれました。祖父（父の父）は、静岡市内で「菊池写場」という写真館を営んでいました。寺町というお寺がたくさん並んでいるところに店舗兼自宅があって、子ども時代の父は、よくお寺で遊んでいたそうです。そのあたりのことは、自伝的作品である『寺町三丁目十一番地』（福音館書店・品切れ。埼玉福祉会版のみ）に詳しく書かれています。

父は小さいころは体が弱かったようで、夏休みには養護学校のようなところに通っていました。本当に弱かったのかどうかはわかりませんが、自分は体が弱いという意識を強く持っていて、けっこう努力した結果、中学生ぐらいに丈夫になったと言っていました。器械体操をするのが好きで、剣道で体を鍛えたとも言っていました。

40年、12歳のときに静岡の大火というのがあって、生家の写真館が焼けてしまいました。祖父がやっとの思いでそれを再建すると、5年後に今度は静岡の空襲で焼けてしまいました。それで、ずいぶん苦労したようです。父は、戦時中に県立静岡商業学校に入学しますが、そのあとは上の学校に進学できずに終戦を迎えます。

20代、児童図書館員への道

戦後、東京の久我山工専という理工系の専門学校に入って、電波工学の勉強を2年ぐらいします。しかし、卒業してもまったく仕事がなく、静岡に帰って土産物店に勤めたりしていました。

父は英語が好きだったので、米国占領軍CIE（民間情報教育局）図書館長が開いていた英会話クラスに通うようになります。やがて父は、CIE図書館のスタッフになりますが、その日系二世の図書館長の推薦により、慶應義塾大学に新設された日本図書館学校の一期生として入学できました。すごく幸運だったと思います。51年、23歳のときです。

日本図書館学校（のちの慶應義塾大学図書館学科）では、アメリカ人の教授陣から図書館学を学びました。在学中は、東京・大森に住み、近所に住む児童文学者・村岡花子さんのもとで、「道雄文庫」の手伝いもしていました。また、このころ児童文学者の石井桃子さんとも出会っています。

慶應義塾大学を卒業すると、54年にフルブライト奨学金を得て、米国オハイオ州のケース・ウェスタン・リザーブ大学大学院に留学します。そのときのフルブライト奨学金の推薦状は、村岡花子さんが書いてくれたと聞いています。

大学院で図書館学修士号を得たのち、ニューヨーク公共図書館に勤務します。1年の予定を延長してもらって、2年間勤務しました。その間、図書館員としてアメリカの児童書に親しみ、多くの作家や編集者と出会います。57年に29歳で日本に帰ってきますから、父の20代は、児童図書館員へ向かっての歩みだったと言っていいでしょう。

父の手帳は、帰国したあとのものは全部残っているのですが、留学中の記録は何も残っていませんでした。ところが一昨年、多摩市の実家を整理しているときに、書斎から留学生時代につきあっていた女性からのラブレターが40通出てきたのです。その人はプエルトリコ人で、大学院の同級生だったようです。かなり親密な仲だったようで、手紙には結婚するのしないのと書いてありました。彼女は大学院を終えてから、プエルトリコに帰って大学図書館に勤め、父はニューヨークの図書館に勤めていました。その間、文通していたようです。

それを読んで、ニューヨーク時代の父の動向が、手にとるようにわかりました。封筒の住所を見れば、どこに住んでいたかもわかります。父がそのころから作家になりたいと思っていたこともわかりました。フルブライト奨学金の留学生は、必ず母国に帰らなければなりません。父は慶應義塾大学の図書館学科の教員になるために日本に帰らなければならなかったのです。

彼女は、プエルトリコ大学の契約が終わったら、父のいるところに行って結婚して家庭を持ちたいと書いている。それに対して、父は日本に帰っ

渡辺鉄太
わたなべ・てつた

1962年、東京都生まれ。言語学研究者。絵本作家。翻訳家。創作絵本に『コアラのクリスマス』（絵／加藤チャコ、福音館書店）、翻訳絵本に「としょかんねずみ」シリーズ（作／ダニエル・カーク、瑞雲舎）などがある。

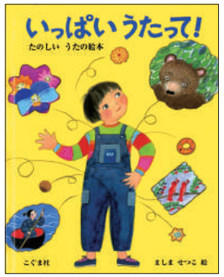
手遊び、歌遊びの絵本大集合

「いとまきのうた」
「おべんとうばこのうた」の
香山美子さんから
メッセージも！

手遊び歌絵本や歌絵本は、読むだけでも楽しいですが
歌に合わせてページをめくれば、自然と手が動き
体も動き、楽しさ100倍ですね。
昔から子どもたちの生活に根づいているわらべ歌はもちろん
新しい遊び歌や、数え歌
あまり知られていない海外の民謡などもご紹介します。
おはなし会でも活用してください。

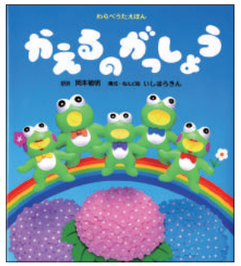
著作権保護コンテンツ

童謡



『いっぱい うたって！』
絵／ましませつこ
1,400円（こぐま社）
「おはながわらった」「ドロップスのうた」「ちょうちょう」「赤い鳥小鳥」など、よく知られている唱歌30曲が季節の移ろいとともに紹介されています。

『おにのパンツ』
作／モリタこなみ　絵／西内としお
510円（世界文化社）
鬼のパンツが空から降ってきました。あれ、パンツが逃げましたよ。みんなで鬼のパンツを追いかけてはきましょう。



『かえるのがっしょう』
訳詩／岡本敏明
構成・ねんど絵／いしはらきん
1,000円（ひさかたチャイルド）
歌いながらページをめくれば、カエルたちと一緒に歌の輪が広がります。ケケ ケケ ケケ ケケ クワ クワ クワ。さぁ、ご一緒に。

『おもちゃのチャチャチャ』
構成・絵／市原 淳
1,000円（ひさかたチャイルド）
静かな、静かな夜。オモチャ箱の中から歌が聞こえてきました。おもちゃのチャチャチャ、おもちゃのチャチャチャ。歌いながらおもちゃたちも踊ります。

『かわいい かくれんぼ』
絵／わらべきみか
700円（フレーベル館）
♪ヒヨコがね　おにわで　ぴょこぴょこ　かくれんぼ♪ 誰もが知っている、サトウハチロー作詞の歌が仕掛け絵本で楽しめます。楽譜つき。

『どんぐり ころころ
おやまへかえる だいさくせん』
作・絵／スギヤマカナヨ
1,200円（赤ちゃんとママ社）
どんぐりがコロコロと池にはまってしまってから土に帰るまでのおはなしが、全部「どんぐりころころ」のメロディにのせて歌えます。

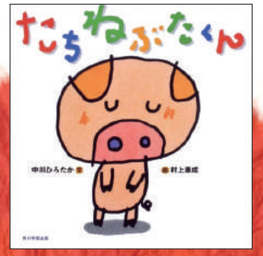
『童謡えほん』
編／萩原昌好
1,600円（あすなろ書房）
「赤い鳥小鳥」や「七つの子」「こがねむし」「おぼろ月夜」など、懐かしい童謡36編が、16人の画家の絵で美しい絵本になりました。

『どんな いろが すき』
絵／100% ORANGE
700円（フレーベル館）
「どんな色が好き？」と歌いながらページをめくってみましょう。赤いページにはポストや太陽、金魚など赤いものがいっぱい！「ぜんぶ！」のページはどんなかな？

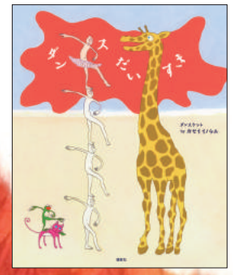
『まて まて まて』
案／こばやしえみこ
絵／ましませつこ
900円（こぐま社）
ハイハイができるようになった赤ちゃんが、喜んでたくさんハイハイするように、昔から楽しまれてきた歌遊びです。「まて まて まて」と追いかけてあげてください。

『ちびすけ どっこい』
案／こばやしえみこ
絵／ましませつこ
900円（こぐま社）
自分でしっかり歩けるようになった幼児はお相撲が大好き。「ちびすけやま、はっけよーい　のこった　のこった」と、軍配も使って遊びましょう。

体を使って遊ぼう



『たちねぶたくん』
文／中川ひろたか
絵／村上康成
1,200円（角川学芸出版）
たちねぶたくんが大好きなのは踊ること！ ごじょがわらさんと一緒に「やってまーれ！ やってまーれ！」と踊ります。「たちねぶた音頭」の楽譜つき。



『ダンスだいすき』
ダンスケッチ／カセイイノウエ
1,300円（論創社）
ねじってのびて、ねじってドーン。ひとりでダンス、ふたりでワルツ、大勢でラインダンス。全身を使ってダイナミックに動いてダンスしてみよう。

『おどります』
作／高畠 純
1,200円（絵本館）
ブタが、タコが、フラミンゴが、衣装をつけて踊ります。メケメケ フラフラ～、メケメケ フラフラ～。たったこれだけの繰り返しなのに、子どもたちは大好きです。

著作権保護コンテンツ

特集

児童書店が選ぶ

クリスマスに贈る絵本

木枯らしが吹き始め、街にイルミネーションがあふれるクリスマスの季節に
大切な人へ贈る絵本を全国の児童書店に教えてもらいました。
書店員おすすめのとっておきの1冊。今回は2000年以降に発売された
比較的新しい絵本の中からチョイスしています。
複数の書店が同じ絵本を推薦しているのも楽しいところ。
そのほか、この秋の新刊クリスマス絵本もご紹介します。

撮影／澤田和廣

著作権保護コンテンツ

編集部おすすめ 冬の絵本

『こうさぎと4ほんのマフラー』
作／わたりむつこ　絵／でくねいく
1,600円（のら書店）
おばあちゃんが編んでくれたマフラーを巻いて、子ウサギたちは冬の森へ出かけていきました。雪が積もった木の下をくぐるように進んでいくと、1匹が落ちてきた雪に埋もれてしまいます。

『サンタクロースと ちいさな木』
作・絵／エアーダイブ
1,280円（Dybooks）
あるところに、とても弱った小さな木がありました。クリスマスのプレゼントを配り終わったサンタが通りかかり、木を連れて帰りました。それから木とサンタはいつでも一緒です。

『アッシジの聖フランシスコ』　新刊
影絵・文／藤城清治
4,300円（女子パウロ会）
裕福な家に生まれながら、貧しい人々に施し、自らも清貧の道を歩んだ聖フランシスコ。その愛と祈りの生涯を、光と影の芸術家、藤城清治が21年の歳月をかけて完成させました。

『クリスマスの大そうどう』
作／デイビッド・シャノン
訳／小川仁央
1,300円（評論社）
今年はいつもより気合いを入れてクリスマスを祝うと宣言したメリウェザーさん。窓にあかりをとりつけることにしました。さぁ、それが大変な騒動を巻き起こします。

『クリスマスにやってくるのは？』
作／K・バンクス
絵／G・ハレンスレーベン
訳／いまえよしとも
1,500円（BL出版）
何かがそこまで来ています。雪が降り積もるそこまで。全編を流れる詩のような文章と、『リサとガスパール』の画家が描く美しい絵が調和しています。

『そらとぶそりと ねこのタビー』
作・絵／C・ロジャー・メイダー
訳／齋藤絵里子
1,600円（徳間書店）
真夜中、ネコのタビーは怪しい物音で目を覚ましました。音のするほうへ行ってみると、フワフワの靴をはいたおじいさんが……。

『どうぶつたちの クリスマスツリー』
作／ジャン・ウォール
絵／レナード・ワイスガード
訳／こみやゆう　1,450円（好学社）
静かな深い森の奥で、クリスマスが始まろうとしています。ゾウが長い鼻で運んだモミの木に動物たちは思い思いのものを持ち寄り、飾りつけをします。

この秋 新刊 の クリスマス絵本

『きょうは クリスマス』
絵・文／小西英子
1,300円（至光社）
ぼくはサンタの格好をして、ケーキ屋さんのお手伝い。マリアさまや天使に扮した人たちの行列に出くわしました。

『クリスマス』
絵／ヤン・ピエンコフスキー
文／木原悦子
1,500円
（日本キリスト教団出版局）
主イエス・キリストの降誕物語を、ケイト・グリーナウェイ賞を2度受賞した画家の美しく、繊細な絵で楽しめます。

『おとうさんの クリスマスプレゼント』
作／スギヤマカナヨ
1,200円（赤ちゃんとママ社）
クリスマスツリーの飾りつけをしながら、お父さんは自分が子どものときにサンタさんからもらったプレゼントの話をしてくれました。

『みんなでクリスマス』
文／ヒラリー・ロビンソン
絵／マンディ・スタンレイ
解説／尾木直樹　訳／きむらゆかり
1,300円（絵本塾出版）
クリスマスの季節、今年はクラスのみんなで老人ホームを訪問することになりました。お年寄りのために何ができるだろう？　みんなはアイデアを出し合います。

『みんなでたのしいクリスマス』
作／トミー・デ・パオラ
訳／みねじまともこ
1,000円（いのちのことば社）
子どもたちによる、劇が始まります。それは、ベツレヘムで生まれたイエスの劇です。

『おとうさんねずみの クリスマスイブ』
原作／クレメント・C・ムーア
文・絵／ダニエル・カーク
訳／わたなべてつた
1,600円（瑞雲舎）
家中のみんなが眠りについたころ、庭のほうからシャンシャンシャンと、にぎやかな音が聞こえてきます。

クレメント・C・ムーアの詩「The Night Before Christmas」

「それはクリスマスの前の夜　だれもが眠りにつき、静まりかえった家の中～」で始まるこの詩は、今から約200年前、ニューヨークに住んでいた神学者のクレメント・C・ムーアが、自身の９人の子どもたちのためにつくりました。のちにサンタクロースと呼ばれるようになったセントニコラスや、シャンシャンと鈴の音を鳴らしながらトナカイがソリをひいてくるというイメージも、この詩がもとになっているといわれています。

この詩を題材にした絵本は、いろいろな画家の絵で複数の出版社から出版され、どれも、クリスマス前夜のワクワクした気持ちが見事に描かれています。P53の『サンタクロースとあったよる』や P56の『おとうさんねずみの クリスマスイブ』も同様です。

『聖ニコラスが やってくる！』
絵／ロバート・イングペン
訳／柳瀬尚紀
1,500円（西村書店／2011）
ここに描かれているサンタクロースはちょっと太ったおじいさんで、まさに私たちがイメージしているサンタクロースそのもの。詩も軽妙なリズムです。

『クリスマスの まえのばん』
絵／ウィリアム・W・デンスロウ
訳／わたなべしげお
1,800円
（福音館書店／1996）
今号で特集している、渡辺茂男さんの訳。1902年に、ウィリアム・W・デンスロウが姪のために絵本に仕立てたものです。

『クリスマスのまえのよる』
絵／ロジャー・デュボアザン
訳／こみやゆう
1,200円（主婦の友社／2011）
色彩の魔術師、ロジャー・デュボアザンの絵によるもの。縦長の判型はサンタクロースが長い煙突を降りてくるためですって。

『クリスマスの まえのよる』
絵／ニルート・プタピパット
編訳／きたむらまさお
3,000円（大日本絵画／2007）
最後の仕掛けのページは、まさに夜空を駆けまわるトナカイとサンタクロース。切り絵の精密さに驚かされます。

『クリスマスのまえのばん』
絵／ターシャ・テューダー
訳／中村妙子
1,400円（偕成社／2000）
これは改訂新版ですが、もとは1997年初版です。ターシャ・テューダーの描く居間や暖炉が年代を感じさせます。